

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特例採集票誌第六二七号
平成二十六年六月一日発行(第百十七卷第六号)

ホトトギス

六月号



俳句随想〔三百八十四〕

汀子

ホトトギス千四百号を出版してより既に八冊目をお手許にお届けした。毎月の出版は大変であるが、読んで下さる方々があるからこそ一生懸命選句をし文章を書いて行く。俳句も新しい若い世代の方々にとって魅力のある俳句でなくてはならない。若い人々の間で生れた言葉の表現に我々の世代は躓いて行くことが出来ないかも知れないが、これらは全て人々が取捨選択してやがて残されて行く言葉となつて次の世代を築いて行くのだと思う。

「ホトトギス」は長い歴史と共に人々に愛される俳誌でなくてはならない。虚子の時代年尾の時代は「ホトトギス」と言えば俳壇の中心を歩いていたと思う。気がついたら「ホトトギス」は一俳誌としてのみ評価されていた。それは何故であろうかと考えたとき、結社の時代、総合誌の時代、そして俳句協会による時代と変遷して来たことを知った。それは昭和五十年から六十年辺りであったか、私は有志を集めて対策を練った。そして生まれたのが日本伝統俳句協会である。その協会は今は公益社団法人日本伝統俳句協会という押しも押されもしない立派な協会として台頭してきた。目的は虚子年尾が守つて来た「花鳥諷詠」の理念を完成さすための俳句の道なのである。

私が子育てのために細々と俳句を作っていた時代、松山の村上杏史さんによばれて頼まれたことがあった。それは私が年尾の後「ホトトギス」を守つて行くようにとのことであつた。

旬日記 汀子

平成二十五年六月二日 芹屋ホトギス会

短夜の寝不足ならぬ旅帰り

六月二日 下萌旬会

晩年の淋しさ告げよ火取虫

麦秋の旅どこまでもどこまでも

ロイヤル俳壇

その仔細知らざるままに明易し

桐の花 旅路 彩る花としかて

人悼む心 短夜なりしかな

癒えられしことはすなはち梅雨の晴

「俳句」八百号 祝句

健脚の今どの辺り五月晴

聞く側に徹してをりぬ明易し

かりそめの命いとひて合歡の花

なほ残す仕事短夜寝ることに

六月八日 北近畿ホトギス俳句大会前日旬会

存間の夢に虚子あり明易し

東より西より集ひ露涼し

どこに立ちても涼風の安国寺

人悼む心の旅 露涼し

六月九日 北近畿ホトギス俳句大会

蛩に明け渡したる夜の帳

時鳥聞く耳となり果せたる

標高のここより返す椽の花

六月十一日 大阪倶楽部

紫陽花の色に雨待つ心とも

明易き中途半端に起きしこと

旅終へて又旅支度明易し

雨呼んでくれさうもなき雨蛙

旬日の夏至にはいとふ心あり

六月十一日 綿業倶楽部

鈴蘭の花に旅路を乗りし日

梅雨のなき蝦夷地の旅に心置く

鈴蘭の大地よ耐へし日を忘れ

六月十三日 漣交社

六甲の一と揺らぎして青嵐

大江山の欲しき空あり青嵐

一雨の欲しき見え隠し花の椽

谷深れぬ池に蜻蛉生れけり

隠沼に蜻蛉生れをりしこと

六月十四日 工業倶楽部

上京の日の短夜を寝過ごせぬ

快晴を發ち梅雨空に着陸す

蝸牛人の気配に聡かりし

六月十五日 句会と講演の会

山道の元氣ふたたび七変化

毒もまた薬ともなりジギタリス

六月十七日 アサヒカルチャー

質問も答へも楽し蟻地獄

涼易き時間やりくりして出掛け

涼易き時間やりくりして出掛け

六月十八日 有恒俳句会

主婦となり先生となり露涼し

梅雨晴間遣り果せねばならぬこと

紫陽花に雨の少なき日のつゞく

夏至近き日の夕暮の雨もよひ

六月十八日 無名会

その声の河鹿と気づくまでのこと

欲しい人持ち帰られよ実梅落つ

取り置き実梅如何と集め置く

明日から雨の予報や実梅もぐ

雨蛙もう見当らぬ屋下り

旅といふ緊張に梅雨晴れしこと

六月十九日 夏潮旬会

待たれぬし雨愛しとせず合歡の花

雨音を聞きて俯瞰の庭若葉

ペーロンののはじまる潮の香を纏ひ

訪ふ門の蜜柑の花のジャカランダ

水音と違ふ雨音梅雨のもの

六月二十日 東海ホトギス同人会

万緑を抜け万緑の二百キ口

恵那峡に辿り着きたる涼しさよ

稿債を残し来しこと明易し

運転の枷を解かれし涼しさよ

大玻璃に俯瞰の湖の涼しさよ

六月二十一日 東海ホトギス俳句大会前日旬会

恵那山は見えぬ梅雨雲ああたり

虚子も来し曾遊地と聞く涼しさよ

ふと昼寝したくなりしと思ひけり

六月二十三日 東海ホトギス俳句大会

虚子句碑を訪ね得しこと恵那の夏

見よとかや今宵大きな梅雨の月

六月二十七日 きざらぎ会

どこまでも卯の花迫る山路かな

動くまで 蠅虎と気づかず

やうやくに梅雨の最中と思ひけり

卯の花の山路ここより引返す

諸鳥の鳴き卯の花の山路半ば

六月二十八日 時雨旬会

生涯を栞る仕事も梅雨半ば

遠くより木天蓼見えて来し山路

りハビリはこれでおしまひ鱈飯

夏至過ぎ逢魔が時の長かりし

風さつと木天蓼の白ひるがへる

進みぬし時計正して夏夕べ

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十五年六月一日 菅屋ホトギス会

黒々と車窓に嵌る雪解富士

六月二日 野分会菅屋例会

風薫る夫を宝と言へる人
空梅雨の十三へ降り立つ佳人
振れ解くより山梔子の香り立つ
山梔子の香に触れ風の饒舌に

六月六日 蕉心会

黒々と水明りして夏の川
蕉像に涼しく祈る元少女
鰺釣れて水面緩んで来りけり
五月雨を待ちくたびれてゐる水面
川風が暑さを忘れさせてくれ
そこの君だけは金魚と違ふやろ
句心は君の日傘に入るより
けんくわして金魚は強くなつてゆく

六月七日 六甲会

蚯蚓這ふ土の一部になり切つて
悲鳴あげても蚯蚓には聞こえない
蚯蚓這ふ二府四県を股に掛け
東京都目黒区碑文谷の蚯蚓
甲子園青芝抜ける決勝打
芝刈らる稲畑汀子邸の黙
畑といふ地球の要蚯蚓這ふ
六月八、九日 北近畿ホトギス俳句大会
老鶯や鶯張りに呼応して

萱葺きの涼しく手入されてをり
露涼しやつと運転代りくれ
ト揺れに始まる茅花流しかな
運転の感覚戻る万緑裡
汗涼しへアピンカーブ続く帰路

六月十日 朝日カルチャー若草句会

滝音に街騒消されゆく早さ
紫陽花の毬の気品といふ角度
大都会一步入れば万緑に
山国の万緑都市の万緑裡
梅雨雲を支へ切つたる摩天楼
万緑を丸く仕上げて神の杜
景涼し天使になつた心地して

六月十三日 土筆会

河鹿聴く神も渡りしせせらぎに
天を向く浜屋顔は雨を恋ひ
黒南風やドームの白を塗り替へて
風に揺れ雨に弾ける花菖蒲
夏鳴の孤高に景を引き締める

六月十五日 ホトギス社句会

ジギタリス俯きながら天を恋ひ
軒下は君の天国 蟻地獄
待つて待つてそのうち飛んで蟻地獄
六月十六日 野分会東京例会
空梅雨も傘手放せぬ雨男
山梔子の香より錆びゆく命かな
空梅雨に山門の朱の黒ずめり
空梅雨の空に突き刺さりしタワ
雨に咲く山梔子は香を封印す
六月二十日 登高会

ビル狭間より梅雨に入る丸の内
猫のひげ明日のついでを知つてをり
青蛙己の色に酔うてをり
神の手が前線引つ張つてついで
思はざる訃報もありてついでりかな

六月二十三日 東海ホトギス同人会 大会

湖を狭めボートの連なれり
空梅雨に鳥語燥いでをりなれり
ボート漕ぐ水の分子を掻き分けて
万緑を水に映して湖の黙
万緑を背負ひ奇岩の現はるる
名古屋より一時間てふ万緑裡
梅雨の月満ちゆく序曲奏でつつ
老鶯に鳴き包まれし虚子の句碑
夢心地和太鼓佳人冷酒哉

六月二十五日 若水句会

埋蔵金伝説ここに小判草
遠景に舟鏝めてやませ吹く
ここ曾て帰農せし家やませ吹く
蝸牛殻に秘めたる恋心

六月二十六日 目黒学園句会

君なのか餓鬼に詠まれし青蛙
濡れ色は初恋の色雨蛙
青蛙雨恋ふ時は涙目に
村中を使ひ切つたる溝浚へ
六月二十七日 「河内野」関東大会
河内より五月晴もて集ひけり
ハンカチを振つて六甲おろしかな
六月三十日 日本伝統俳句協会通常総会
総会を涼しき声の司る

雑詠

廣太郎 選

寒雀出て来て日差膨らます 神戸 後藤立夫
 午祭りつねに酒を奉る 同
 かまくらにありたる隣所かな 相模原 木村享史
 明けて来し山河や鶴の羽の下 同
 夕月へ行きて返して鶴の舞ふ 同
 夜の帳万羽の鶴を沈めたる 同
 雛の間の世界静かにはなやぎぬ 榎原 稲岡 長
 めづらしく雪積む朝や鶯来 同
 むごき世の踏絵の画像しづかにも 同
 行年の愛して小さき旅靴 熊本 岩岡中正
 黒々と海底を年逝きにけり 同
 一列に鷗は年を送りけり 同
 防具脱ぎ戦ひぬきし息白し 福山 竹下陶子
 ボーナスをもらひ聖歌の街ぬけて 同
 虎落笛 日本海の濤と消ゆ 同
 風景に少し遊びて木の葉散る 大阪 薦 三郎
 焚火に木加へ時間を加へたる 同
 木の葉散る刻が来たれば木を離れ 同

麦踏んで踏んで夕日を連れて来る 神戸 涌羅由美
 両の手を父母に預けて麦を踏む 同
 麦踏に七転八起教へられ 同
 空と海分か来たりし淑気かな 東京 河野美奇
 立てば海屈めば野水仙の中 同
 ちらちらと疎林の日射福寿草 同
 浪音に色と香をつけ春隣 同 橋本くに彦
 水仙の香と潮の香の共演に 同
 寒といふ最後のあがき足もとに 同
 悴んで髪の毛の先まで尖りけり 神戸 山田佳乃
 初暦掛けて整ふ客間かな 同
 風花を片寄せてある摩天楼 同
 山は静水は動春遠からじ 奈良 古賀しぐれ
 鶯や不意に生まるる詩心 同
 五重塔五重の翳の冴返る 同
 いにしへのかしこきあたり春の雪 神戸 立村霜衣
 淡雪の光極まるとき消ゆる 同
 春時雨あをあと散り苔深し 同
 寒月や更けて人なき京の路地 長岡 安原 葉
 芋焼けし匂ひ漂ひそむ焚火 同
 風強き里の麦の芽逞しき 同
 淑気満つ最後の一人起きてきて 龍ヶ崎 今橋真理子
 春著著てちよつと待たせてしまひけり 同
 寒鴉飛んで野の色奪ひけり 同

雑詠句評（五月号より）

むつみ・とほ歩・憲明

中正・葉・保佳

眞理子・静 龍・千鶴子

美 奇・廣太郎

花嫁の母とは笑顔冬薔薇 龍ヶ崎 今橋眞理子

新郎新婦から最後に貰う立派な薔薇に喜びと満面の笑みが伝わる。昔から結婚となると「花嫁の母」より「花嫁の父」の存在を取り上げられることが多いが、母の「笑顔」から娘を嫁がせる安堵感が伝わる。あえて母の姿を詠むことで本来意味深い何も語らない「花嫁の父」の存在を含んでいるような気がする。語らずともその傍らにいる父親としての淋しさが見えるのは筆者だけだろうか。ただしここでの「冬薔薇」は温室の立派な薔薇と思うが、本来「冬薔薇」は外に寒そうに咲く薔薇とされているが、解釈もだんだん現実に合わせて拡大されていくのだろうか。（むつみ）

この度御嬢様が御結婚された作者である。結婚式の当日であろう。娘の晴れ姿をどんな喜びで迎えられたのであろう。又、それとは別に、愛娘を嫁がせるといふ、親ならではの気持も垣間見られる。季節の楚々とした姿がそれを物語っている。信仰心に支えられた家族の絆が見て取れる。（廣太郎）

嫁が君ひよつこり猫はまどろんで 神戸 山西商平

嫁が君、正月三ヶ日の鼠のことである。

さて、猫と鼠、両者の関係故、一触即発……と思いきや、掲句の場合は、ひよつこり現れた鼠に対して、宿敵の猫は、まどろんでいるのである。

正月にふさわしく、めでたし、メデタシの図である。

俳諧味満点の句である。（とほ歩）

昔の話だが、丸ビルにホトトギス社があった時には、其処で結構鼠を見た。現在でも時々、溝鼠だろうが、溝から出てきて鴉に遊ばれていたりするのを時々見掛けたりするので、都会でも強かに生きているのだろうか。正月に見る鼠「嫁が君」が、忌まわしいのではなく、可愛く描かれている。（廣太郎）

（以下略）

天地有情

山少し膨んで来て薄紅葉
外灯の他は寝てをり後の月
蟻螂の枯れゆく歩幅ありにけり
鶏頭の咲いて空気の入れ替はる
細りゆく月も春待つものとして
晴れわたる日とて風棲む枯野かな
父の背のごとくに年の逝きにけり
涙もろき人来て御慶述べにけり
雪舞ひて景新しくあたらしく
寒月を仰ぎて鍵を探しをり
雪雲の渦押し寄せて来りけり
雪明り富士一睡もさせざりし
雛飾りきれいな季節到来す
愛のチョコ愛はこんなに気を遣ふ
春の旅人語を欲りて奥丹後
屋根の雪生活の音の消えてをり
しばれるてふ言葉しみじみ二月かな
病む妻に我が三ヶ日饒舌に

周南 小川龍雄
同
東京 稲畑廣太郎
同
長岡 安原 葉
同
熊本 岩岡中正
同
東京 今井千鶴子
同
同 河野美奇
同
神戸 後藤立夫
同
榎原 稲岡 長
同
仙台 赤川誓城
同

福寿草どこにおいても改る
美しき名を貰うてゐても嫁が君
燃え尽きるまで大楯でありにけり
悴みて玉の如くに湯呑もつ
初絵馬として宮島の福杓文字
破魔矢まで清盛好み巖島
梅見茶屋人は膨らみ憩ひをり
灯がつけばばたばた閉ぢて梅見茶屋
元朝の空へ平和の大花火
ホ句詠みて七十余年去年今年
秋澄むやいちにち思ひ出の中に
はにかむといふも美しこぼれ萩
里神楽横恋慕とは神代より
毛脛見え鉦女狂へり里神楽
大綿の逢魔が時を誘へる
虚子の句碑守りながらの避寒宿
北風に吹き上げられし昼の月
ふるさとは北風さへも心地よく

宝塚 水田むつみ
同
群馬 中杉隆世
同
神戸 後藤比奈夫
同
熱海 嶋田一步
同
福山 竹下陶子
同
東京 今井肖子
同
神戸 三村純也
同
同 千原叡子
同
東京 大久保白村
同

心子選

天地有情句評

汀子

新年を迎えるときの決意を托す父上の思い出。

雪舞ひて景新しくあたらしく 東京 今井千鶴子

滅多に降らない東京の雪の景色を描いて妙。

雪雲の渦押し寄せて来りけり 東京 河野美奇

雪となる空の様子への恐怖。

雛飾りきれいな季節到来す 神戸 後藤立夫

女兒の節句ならではの明るさが籠められた一句。

屋根の雪生活の音の消えてをり 樺原 稲岡 長

降り積もる雪による変化を捉えた秀句。

赤や黄のもみじが山をふつくら見せはじめたのであろう。

蠶螂の枯れゆく歩幅ありにけり 東京 稲畑廣太郎

蠶螂の長い脚の歩き難そうな弱り方が描けた。

晴れわたる日とて風棲む枯野かな 長岡 安原 葉

広い枯野の冬の快晴。いつも風が強い野の佇まいを想像する。

父の背のごとくに年の逝きにけり 熊本 岩岡中正

(以下略)